

# 令和 8 年度関東高等学校サッカー記念大会

報告者:高体連技術部員 川越南高校 久津間岳文

5月23日24日の2日間に茨城県の鹿島ハイツスポーツプラザ、北海浜多目的球技場、高松緑地で令和8年度関東高等学校サッカー記念大会が開催された。

大会は各都県予選1位の8チームをAグループ、2位の8チームをBグループとし、それぞれ40分ハーフのトーナメント方式で実施された。また、今年は初日に2試合行うため交代人数を9人、回数制限無しというレギュレーションとなった。Aグループの1位を優勝、2位を準優勝とし、準決勝で敗退した2チーム及びBグループの1位を3位とする規定である。埼玉県からは県予選の結果、Aグループに武南高校、Bグループに聖望学園高校が出場した。

武南高校は初日に日大明誠高校(山梨県)と対戦して2-0で勝利し、続く準決勝での真岡高校(栃木県)戦では3-1、2日目の決勝戦では前橋育英高校(群馬県)に3-1で勝利し、平成5年の第36回大会ぶり5回目の優勝を見事果たした。日大明誠戦では強風で向かい風の中5-2-3でミドルブロックを形成する相手に対してGKからボールを丁寧に繋ぎゴールへ迫る。9分にMF⑧小山の縦パスをMF⑭三友がフリックし、FW⑬岩澤からMF⑪渡辺に繋ぎ無人のゴールに流し込んだ。全員が連動した攻撃で先制点をあげた。その後もショートパスとミドルパスを織り交ぜて何度もゴールへ迫り、前半だけで14本のシュートを放つがシュート精度を欠いてしまい追加点には繋がらない。日大明誠は2トップを残し、カウンターを狙うも、武南はCB⑤葛西⑤高石を中心に安定した守備でチャンスを作らせなかった。交代で入ったMF⑳沖田がアディショナルタイムに追加点をあげて勝利を決定づけた。2時間後に行われた準決勝の真岡高校(栃木県)では初戦のスタメン3名以外を全て入れ替えてターンオーバーで試合に臨んだ。5-4-1で構える相手に対して初戦同様にボールを保持しながらサイドを有効に使いアタッキングゾーンまでは進入した。しかしゴール前の連携がうまくいかずにシュートまではいくことが出来ない時間が続いた。30分にはロングボールの処理をミスしてしまい失点を許してしまう。武南高校はハーフタイムに4人の選手を交代し、逆転を狙いにいった。43分に交代が功を奏しMF⑧小山の放ったミドルシュートをGKが弾いたところをMF⑱栄隈が押し込んで同点に追いついた。この1点で勢いづき、48分には右サイドからカットインしたMF⑦八百川のクロスを逆サイドからゴール前に入ってきたMF⑪渡辺がダイレクトでシュートを決める。攻撃における距離感が良くなったことで攻守の切り替えもスムーズになり、相手陣地でプレーする時間が長くなり、真岡高校のカウンターを許さない。76分に⑧小山のスルーパスをFW⑬岩澤が折り返して⑧小山がゴールネットを揺らして相手を突き放し、ゲームを決めた。決勝戦は前橋育英高校(群馬)との一戦となった。武南高校は序盤からチーム全員がアグレッシブに攻守において強度の高いプレーで挑んだ。6分にMF⑦八百川がライン間で受けるとドリブルで持ち込み背後に抜け出したFW⑬岩澤が右足でゴールへ流し込み先制点をあげた。その後もミドルブロックを作る相手に守備の立ち位置を見ながらスペースを有効に使い、⑧小山⑥小川の2人が相手FWの脇やボランチの脇でパスを受けながら長短のパスで攻撃のリズムを作り出した。14分には再び⑦八百川がライン間で受けると内側に入ってきたMF⑨鞭馬にパスし、そのままターンから左足を振り抜き追加点を挙げた。その後も素早いプレッシングから前橋育英高校の攻撃を封じ込め、チャンスを作らせない。アディショナルタイムにPKを獲得し、⑬岩澤が落ち着いて決めて3-0で前半を終えた。後半から前橋育英はメンバー変更に加え、システムを1-3-4-3に変更し、サイドから仕掛ける回数が増えた。失ってもすぐに奪

い返すなど全体のプレースピードが上がり、武南高校は押し込まれる苦しい時間が続く。54分にはGKへのバックパスを狙われ失点してしまう。その後も押し込まれる展開が続くが、DF⑬石川⑤葛西⑮高石⑯大久保の守備能力の高さと粘り強い守備でゴールを割らせない。そのまま3-1で武南高校が勝利した。

聖望学園高校は中央学院高校（千葉県）に0-4で初戦敗退となった。聖望学園は1-4-2-3-1のシステムで前線から素早いプレッシングをかけて試合の主導権を握ろうとする。一方の中央学院高校は自分たちのスタイルであるドリブルを駆使し、ゆっくりとした攻撃を試みる。序盤は聖望学園高校が試合を優勢に進め、FW⑨前住のポストプレーから左右に散らし、特に右サイドのMF⑭水村が縦への突破から得たロングスローやCKなどから決定機を作り出したが、決め切ることができなかった。16分に落ち着きを取り戻した中央学院高校の細かいパスワークから中央突破を許し先制を許す。その後も前線からプレスをかけるが、中央学院高校の流動的なポジショニングと1人1人のテクニックの高さからボールを高い位置で奪うことができず、空いたスペースを有効に使われて前進されてしまう。31分にはロングスローのセカンドを回収されてカウンターで追加点を許す。続く33分にも失点し0-3で前半を折り返す。ハーフタイムに2人の交代をして流れを変えようと試みるが、56分に右サイドを突破され、シュートのこぼれを押し込まれて4点目を奪われてしまう。そのまま中央学院高校が準決勝に駒を進めた。聖望学園高校は2試合目の市立橘との試合は1-0で勝利を収めた。

優勝は武南高校、準優勝は前橋育英高校、3位は真岡高校、慶應義塾高校、中央学院高校となった。また、得点王は中央学院の北田、アシスト王は武南高校の八百川、大会最優秀選手は武南高校の小川が獲得した。今大会は交代人数が9人、1日に2試合という稀なレギュレーションとなった。疲労がみられる中での試合となったが強度の高いプレーを継続できるチームが勝ち進んだ。また、選手層の厚さが鍵となり、交代のタイミングやターンオーバーをしてもクオリティを確保できることが必要となった。ただ今大会のレギュレーションのメリットとして多くの選手が試合経験を積むことができたのは今後のチーム力向上に欠かせない要因となったはずである。今後、高体連主催の大会はインターハイと選手権が控えている。この2大会においても本県代表の躍進に期待したい。